原著論文

外国人介護職員の日本語能力レベルによる職業性ストレスについての検討
－来日１年目を対象に－

山本哲子[1)]，水上勝義[2)]

【目的】来日１年目の外国人介護職員を対象に日本語能力による職業性ストレスの違いについて調査を行い、日本語レベル別のストレス要因を検討することである。
【方法】経済連携協定（EPA）で来日中の介護福祉士候補者のうち、来日１年目の者を対象とし、郵送自記式質問紙法で調査を実施した。得られた回答から「未取得者とN5・N4取得者（日本語能力が低い群）」と「N3以上取得者（日本語能力が高い群）」に分け、日本語能力レベルによる職業性ストレスの違いについて検討した。
【結果】本研究に同意の得られた39名を分析対象者とした。「未取得者とN5・N4取得者」は23名で、「N3以上取得者」は16名であった。相関分析の結果から、2群に共通して「仕事や生活の満足度」が低いと「心理的ストレス反応」が高いことが示された。また、「日本語能力が低い群」と「日本語能力が高い群」では、「心理的ストレス反応」に、それぞれ異なる項目も関連することが示された。
【結論】来日１年目の外国人介護職員は、日本語能力によって「心理的ストレス反応」に関連する要因は異なり、日本語能力によって異なるメンタルサポートが必要なことが示唆された。

キーワード：外国人介護職員，日本語能力，職業性ストレス，
首尾一貫感覚（SOC），心理的ストレス反応

[1)] 順天堂大学　保健看護学部
[2)] 筑波大学大学院　人間総合科学研究科

Ⅰ．緒言

現在、外国人医療福祉人材が日本の介護分野に従事する枠組みは、主に経済連携協定（Economic Partnership Agreement 以下 EPA と略す）をもとにした制度と技能実習制度の二種類である。EPA に基づいた受入れは、2008 年度にインドネシアから始まり、フィリピン、ベトナムと、これまでに 4,265 名（就学コース除く）の介護福祉士候補者が来日し、985 名が国家試験に合格している[1)]。2017 年 11 月には技能実習の対象職種に「介護」が追加され、外国人医療福祉人材の受入れの枠組みが広がった。

これまでの研究において、外国人医療福祉人材にとって言語・コミュニケーションが適応の壁として指摘されている[2-8)]。上野[4)]は EPA 介護福祉士候補者を対象に調査を実施し、着任直後は EPA 候補者が言語の習得が不十分なまま、時間に追われる介護現場で就労を始めざるを得ないために起こる混乱を指摘している。外国人看護師の「言葉の壁の克服」は最初の 2 ～ 3 年の主要な適応要素であり[2)]、在留年数が浅い外国人医療福祉人材にとって言語・コミュニケーション能力は業務を遂行し異文化の中で生活する上で切り離すことの出来ない課題である。この課題は、外国人医療福祉人材だけでなく母国以外の国に住む移民の人々にとってもストレスに関連した課題となっている[9)]。しかしながら、言語・コミュニケーション能力がストレス要因であることが指摘されているものの[10)]、言語能力と職業性ストレスの詳細な検討はきわめて少ない。来日 1 年目から来日 5 年目以上までを対象とした我々の先行研究[11)]では、EPA 介護福祉士（候補者含む）の職業性ストレスの「心理的ストレス反応」と「日本語能力試験レベル」には、関連がみられなかった。しかしながら、この検討では、日本語能力が十分なレベルにある対象が多く含まれており、日本語能力とストレス反応の関連を検討するには、来日後まもない外国人介護福祉士候補者を対象にした検討が必要であるという課題が残った。また、技能実習生は、共通した事前語学研修が行われていないため日本語能力が低い者が多く、他職種ではあるが、技能実習生の精神健康度と日本語レベルとの関連がみられたことが報告されている[12)]。介護職種の技能実習生も新たに来日するようになったため、外国人介護職員の語学レベルと職業性ストレスの関連を明らかにし、語学レベルに応じた対応策を検討することが今後ますます重要になると考える。

なお、介護職員の職業性ストレスについては、ストレス対処力を表す個人特性である首尾一貫感覚（sense of coherence 以下 SOC と略す）と介護職員のストレス反応が関連することが報告されている[13)]。SOC はストレスフルな出来事・状況に晒されながらも、それに対し、その人の内外にある資源を上手に動員し対処することによって、心身の健康を守れるばかりか、それを成長・発達の糧にさえ変えて、健康で元気に明るくいきいきと生きていくことを可能にする力、またはその源であり、一言で言えば「健康に生きる力」である[14)]。介護職員は SOC の下位概念の「有意味感」が「活気」と、「把握可能感」が「イライラ感」「抑うつ感」「不安感」「身体愁訴」などと関連し、介護職員のストレス軽減のために SOC を向上させる重要性が報告されている[13)]。また、我々の研究でも EPA 介護福祉士（候補者含む）において「心理的ストレス反応」と有意に関連がみられた項目として、男女ともに「把握可能感」「有意味感」が挙げられ、女性は加えて「処理可能感」との間にも有意に関連がみられた[11)]。したがって、言語・コミュニケーションストレスを抱える外国人介護職員にとっても、ストレス反応の低減作用をもつ SOC の重要性が示されている。

そこで本研究では、来日まもない外国人医療福祉人材一人一人に、より適したサポートを行うための示唆を得ることを目的とし、EPA で来日した 1 年目の介護福祉士候補者を対象者に、日本語能力レベルと職業性ストレスの違い、および日本語能力レベルの違いによる心理的ストレス反応と職業性ストレスや SOC との関連について検討する。

Ⅱ．方法

１．対象者

厚生労働省が公開している「介護福祉士国家試験における経済連携協定（EPA）に基づく外国人介護福祉士候補者の合格者」に掲載されている全国の 187 施設のうち、事前の電話による調査依頼にて、「協力する」「調査内容を確認して協力を検討する」と返答の得られた 27 施設に勤務している、EPA で来日中であり、来日 1 年目の介護福祉士候補者を対象者とした。

２．調査方法

平成 28 年 6 月～平成 28 年 8 月に郵送自記式質問紙法による横断調査を実施した。調査票は人数分を施設の担当者へ郵送し、対象者への配布、回収を依頼した。回収に際しては対象者に不利益が無いよう各自で厳封後、担当者にまとめて投函もしくは各自で投函してもらった。研究への参加は対象者自身の自由意思によって決定され、返信をもって同意を得たものとした。調査には全てふりがなを振った日本語の調査票と、二社の翻訳会社へ依頼し整合性を担保し作成したインドネシア語・英語・ベトナム語に訳した調査票を使用した。

３．調査内容

1）属性

性別、年代、国籍、来日年度、日本語能力試験取得レベルについて尋ねた。日本語能力試験[15]は、日本語を母語としない人の日本語能力を測定する試験として実施され、N1 が最も日本語能力が高く、N5 が最も低い認定レベルである。中間レベルである N3 は、日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができ、新聞の見出しなどから情報の概要をつかむことができるレベルであるとされている。

2）職業性ストレス簡易調査票[16]

平成 7 ～ 11 年度労働省委託研究「作業関連疾患の予防に関する研究」のストレス測定グループによって作成された職場で比較的簡便に使用できる自己記入式のストレス調査票である。仕事上のストレス要因、ストレス反応、および修飾要因が同時に測定できる多軸的な調査票で全 57 項目からなる。仕事のストレス要因に関する尺度は、心理的な仕事の量的負担（以下「仕事の負担（量）」と略す）、心理的な質的負担（以下「仕事の負担（質）」と略す）、身体的負担度、コントロール度、技能の活用度、対人関係、職場環境、仕事の適性度､働きがいの 9 つから成り立っている。ストレス反応については、心理的ストレス反応、身体的ストレス反応について測定しており、「心理的ストレス反応」は活気、イライラ感、疲労感、不安感、抑うつ感の 5 つの尺度からなり、身体愁訴は 11 項目の身体的ストレス反応から成り立っている。修飾要因は、上司、同僚、および配偶者・家族・友人からのサポートに関する 9 項目、仕事あるいは家庭生活に対する満足度の 2 項目から成り立っている。各項目に対する回答は 4 件法（1= そうだ、2= まあそうだ、3= ややちがう、4= ちがう）であり、素点換算票を使用することでストレス評価を行うことができる。本研究では、標準集団の素点換算表 version2R を使用した。

3）13 項目 7 件法版 SOC スケール[17]

SOC を測定する尺度である。13 項目 7 件法 SOC スケール（以下、SOC-13 とする）は、SOC-29 の短縮版であり、信頼性及び妥当性は検証されている[18,19]。回答はそれぞれの質問項目について 1 ～ 7 点の semantic differential 法による測定となっており、回答を単純に合計した 13 ～ 91 点が得点範囲であり、点数が高いほど SOC が高いとされている。SOC は、自分の内外に生じる環境刺激は秩序づけられており、予測と説明が可能であるという確信をあらわす「把握可能感」、その刺激がもたらす要求に対応するための資源はいつでも得られるという確信を表す「処理可能感」、自分が直面する問題には、解決に向けた努力のしがい、苦労のしがい、挑戦のしがいを感じられる感覚である「有意味感」の 3 つの下位概念からなる[14]。

４．分析方法

職業性ストレス簡易調査票と SOC-13 はそれぞれのマニュアルに従って点数化を行った。日本語能力での比較検討を行うために、対象者を介護職種の技能実習生受入れ要件として望ましいレベルの日本語能力検定 N3 取得の有無を基準に、未取得者と N5・N4 取得者を「日本語能力が低い群」、N3 以上取得者を「日本語能力が高い群」の 2 群に分け分析を進めた。①職業性ストレス及び SOC の各項目の平均点の 2 群の比較を、t 検定を用いておこなった。その後、②職業性ストレス簡易調査票の「心理的ストレス反応」と、職業性ストレス簡易調査票の「ストレス要因」「緩衝要因」の各項目、SOC の「把握可能感」「処理可能感」「有意味感」の関連について Pearson の積率相関係数を求めた。「心理的ストレス反応」は「活気」「イライラ感」「疲労感」「不安感」「抑うつ感」を合わせたものである。分析は IBM SPSS Statistics24 を使用し、$p < 0.05$ を有意とした。

なお、本研究は筑波大学体育系研究倫理委員会の承認を得て実施した（体 27-170）。

Ⅲ．結果

１．属性（表 1）

事前の調査依頼で協力する（もしくは協力を検討する）としていた 27 施設（EPA で来日中の外国籍労働者 151 名）中、回答を得られたのは 19 施設（同 106 名）、回収率は 70.2% であった。このうち、本調査の対象となる来日 1 年目を抽出し、さらに調査票に未回答箇所のあったものを除外した有効回答は 39 名分（有効回答率 36.8%）であった。日本語能力試験取得レベルの「未取得者と N5・N4 取得者」は 23 名、「N3 以上取得者」は 16 名であった。「性別」「年代」「国籍」「介護の仕事が楽しいか」の項目において、カイ

表 1　来日 1 年目の EPA 介護福祉士候補者の属性および仕事に対する認識

n=39

項目	全体		未取得者とN5・N4取得者		N3以上取得者		有意確率
	度数	%	度数	%	度数	%	
性別							
女性	27	69.2	18	78.3	9	56.3	0.174
男性	12	30.8	5	21.7	7	43.8	
年代							
20代	34	61.5	18	78.3	16	100.0	0.066
30代	5	12.8	5	21.7	0	0.0	
国籍							
インドネシア	14	35.9	7	30.4	7	43.8	0.001 **
フィリピン	19	48.7	16	69.6	3	18.8	
ベトナム	6	15.4	0	0.0	6	37.5	
日本語能力試験取得レベル							
N1	0	0.0	−	−	0	0.0	
N2	5	12.8	−	−	5	12.8	
N3	11	28.2	−	−	11	28.2	
N4	7	17.9	7	17.9	−	−	
N5	5	12.8	5	12.8	−	−	
未取得	11	28.2	11	28.2	−	−	
介護の仕事が楽しいか							
とても楽しい	2	5.1	1	4.3	1	6.3	
楽しい	12	30.8	5	21.7	7	43.8	0.387
どちらともいえない	21	53.8	15	65.2	6	37.5	
楽しくない	4	10.3	2	8.7	2	12.5	
全く楽しくない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	

カイ二乗検定　＊p<0.05,　＊＊ p<0.01

二乗検定を行った結果「国籍」は有意差を認めたが、それ以外の項目では有意な差を認めなかった。

２．職業性ストレスと SOC の２群間比較（表２）

本研究では職業性ストレス調査の 57 項目を合わせた得点分布に正規性を認め、Cronbach の α 係数は 0.745 であった。SOC-13 においても 13 項目を合わせた得点分布に正規性を認め、Cronbach の α 係数は 0.680 であった。

日本語能力試験の「日本語能力が低い群」と「日本語能力が高い群」の 2 群で職業性ス

表 2　職業性ストレス簡易調査票および SOC 得点の日本語能力別比較結果

n = 39

	〈日本語能力が低い群〉(n=23)	〈日本語能力が高い群〉(n=16)	
	M	*M*	有意確率
【職業性ストレス簡易調査票】			
（仕事のストレス要因）			
仕事の負担（量）	8.57±2.35	8.56±2.28	0.997
仕事の負担（質）	10.30±1.84	9.69±2.27	0.356
身体的負担	3.74±0.45	3.69±0.60	0.761
対人関係ストレス	7.04±2.27	5.44±2.10	0.031 *
職場環境	1.70±0.76	1.50±0.63	0.405
仕事のコントロール度	8.78±1.91	8.50±2.39	0.684
技能の活用度	2.17±0.78	2.00±0.97	0.538
仕事の適性度	2.61±0.84	2.63±0.89	0.954
働きがい	3.17±0.78	2.88±1.02	0.307
（ストレス反応）			
活気	7.48±2.19	7.88±2.03	0.570
イライラ感	5.83±2.42	5.56±1.93	0.720
疲労感	7.87±2.16	6.75±1.88	0.102
不安感	6.17±2.10	5.44±1.75	0.258
抑うつ感	12.04±4.17	10.00±3.35	0.112
身体愁訴	22.96±6.85	19.88±5.68	0.148
（修飾要因）			
上司からのサポート	8.74±1.81	7.75±2.59	0.169
同僚からのサポート	8.13±1.74	8.13±2.42	0.994
家族友人のサポート	11.70±1.06	11.31±0.95	0.255
仕事や生活の満足度	5.87±1.18	5.31±1.74	0.240
【SOC-13】			
総得点	52.39±7.64	54.06±4.96	0.448
把握可能感	19.96±4.88	21.38±3.54	0.327
処理可能感	16.39±2.69	15.63±2.19	0.352
有意味感	16.04±2.93	17.06±2.86	0.288

対応のない t検定　＊p＜0.05　日本語能力が低い群：未取得・N5・N4、日本語能力が高い群：N3以上

トレスの平均値を比較した結果、「対人関係ストレス」に有意差（t=2.24, df=37, p=.031）を認め、「日本語能力が低い群」の方がストレスが高い結果となった。他の職業性ストレスの項目には有意差を認めなかった。また、SOC の把握可能感、処理可能感、有意味感いずれも 2 群間に有意差を認めなかった。

３．心理的ストレス反応と関連する要因

「心理的ストレス反応」と関連する要因を見出すための相関分析の結果、2 群に共通して＜「仕事や生活の満足度」が低い＞と「心理的ストレス反応」が高いことが示された。「日本語能力が低い群」では、＜「仕事の負担（質）」が高い＞＜「仕事のコントロール度」が低い＞＜「把握可能感」が低い＞と、「ストレス反応」が高くなるという結果となった。「日本語能力が高い群」では、＜「対人関係ストレス」が高い＞＜「仕事の適性度」が低い＞＜「働きがい」が低い＞と、「心理的ストレス反応」が高くなるという結果が示された（表 3）。

Ⅳ．考察

職業性ストレスについて両群を比較した結果、「日本語能力が低い群」の方が「日本語能力が高い群」よりも「対人関係ストレス」が高く、有意差を認めた。来日 1 年目の対象者は日本語能力が不十分な場合、同僚や利用者が話していることが理解できず、対人関係ストレスが高くなる可能性が考えられる。加えて、外国人医療福祉人材は日本人介護職者よりも本来コミュニケーション能力が高いことが報告されており[20]、伝えたいことを伝えられない、コミュニケーションがうまくとれないことを日本人以上にストレスに感じて

表 3　心理的ストレス反応と関連する要因－Pearson の相関分析の結果から－

n＝39

	〈日本語能力が低い群〉（n=23）		〈日本語能力が高い群〉（n=16）	
	相関係数	有意確率	相関係数	有意確率
仕事の負担（量）	0.266	0.220	0.397	0.127
仕事の負担（質）	0.578	0.004 **	−0.124	0.646
心理的な身体的負担度	0.358	0.093	0.058	0.832
対人関係ストレス	0.270	0.212	0.742	0.001 **
職場環境	−0.082	0.708	0.176	0.515
仕事のコントロール度	−0.464	0.026 *	0.010	0.971
技能の活用度	−0.068	0.757	−0.238	0.374
仕事の適性度	−0.076	0.731	−0.626	0.010 **
働きがい	−0.126	0.566	−0.552	0.027 *
上司からのサポート	−0.063	0.774	0.047	0.862
同僚からのサポート	−0.027	0.904	−0.462	0.072
家族友人のサポート	0.140	0.523	−0.213	0.429
仕事や生活の満足度	−0.439	0.036 *	−0.526	0.036 *
SOC				
把握可能感	−0.473	0.023 *	−0.369	0.160
処理可能感	−0.357	0.094	−0.072	0.792
有意味感	−0.283	0.191	−0.197	0.466

Pearson積率相関係数　＊p＜0.05,　＊＊ p＜0.01
日本語能力が低い群：未取得・N5・N4、日本語能力が高い群：N3以上

いると推察される。「日本語能力が高い群」は「日本語能力が低い群」よりも「対人関係ストレス」が低かったが、「対人関係ストレス」は「心理的ストレス反応」と有意な相関関係を認めた。「日本語能力が高い群」は、日本語能力が良好な分、利用者に対してケアの関わりが多くなり、また、介護職スタッフや他職種スタッフとも関わる場面がより増すことが推測される。介護業務においては同一職種間での人間関係によるストレスだけでなく、多職種によるチームアプローチが要求されるため、職種間の理解不足等から生じる精神的ストレスが指摘されている[21]。また、職業性ストレス簡易調査票の「対人関係ストレス」の質問項目に「部署内で意見のくい違いがある」「私の部署と他の部署とはうまが合わない」といった項目が含まれている。このように「日本語能力が高い群」は、利用者に対してのみならず、同僚や他職種との対人関係ストレスも高じる可能性が考えられる。以上から、同じ対人関係ストレスでも、日本語能力の違いにより、内容が異なる可能性が示された。日本人を対象とした平成30年度介護労働実態調査[22]によれば、介護関係の仕事を辞めた理由は「職場の人間関係に問題があったため」が一番多いことが報告されており、来日1年目の介護福祉士候補者が働く施設では、日本語能力に端を発し彼らが自覚する人間関係のストレスに十分理解し対応することが求められる。

「日本語能力が高い群」は「対人関係ストレス」に加え、「仕事の適性度」「働きがい」の低さと「心理的ストレス反応」の高さに有意な負の相関関係がみられた。EPA介護福祉士候補者は、母国で看護を学び来日している者が多い。畠中ら[23]は外国人介護職者へのインタビュー調査を通し、外国人は母国と日本のケアの差異、職場での慣習やルールへの適応を困難と感じていたと指摘している。事前に説明会や研修などで介護の仕事について説明が行われているが、働き始めて実感することも多いと考えられる。「日本語能力が高い群」は仕事の内容が自分には合っていないと感じたり、働きがいを感じないことが「心理的ストレス反応」に繋がる可能性がある。そのため、施設の人事管理者に加えて、実際現場で関わる部署の管理者や教育担当者も赴任した外国人介護職者の母国で行っていた具体的な職務内容や来日目的、モチベーションについて理解を深めておくことで、外国人介護職者のストレスに気付きやすくなるのではないだろうか。

「日本語能力が低い群」は、「仕事の負担（質）」の高さと「心理的ストレス反応」の高さに有意な正の相関関係がみられた。「仕事の負担（質）」には自分の仕事が「かなり注意を集中する必要がある」「高度の知識や技術が必要なむずかしい仕事だ」との質問項目が含まれている。「日本語能力が低い群」には、当初は彼らが行うケアをはじめとする業務の難易度を緩和するなどの対策が必要なことが示唆された。ただし、「心理的ストレス反応」には「仕事のコントロール度」も有意な負の相関を示し、業務の順番やペース配分を全て指示し仕事のコントロール度が低下することはストレス反応の増加につながる可能性があることも考慮する必要がある。

契約を途中で打ち切って帰国したフィリピン人を対象に行った調査では、途中帰国の要因に仕事の疲れと気晴らしの少なさが指摘されており、仕事と勉強に専念するべきとの方針で過疎地にある施設から都市部のショッピングセンター等へ出かけることを制限されたEPA介護福祉士候補者の経験が報告されている[24]。外国人看護師・介護福祉士支援協議会[25]の調査によればEPAへの応募理由は「日本に行きたかったから。日本文化に興味があったから」が最も多かった。本研究では両群共通して「仕事や生活の満足度」の低さと「心理的ストレス反応」の高さが関連することが示された。このことから、休日や業務時間外の過ごし方に制限をかけることは望ましいとはいえず、生活の満足度が向上するような対応が外国人介護職者のメンタルヘルスを保つ一助となると考えられる。

なおSOCとストレスとの関連については、「日本語能力が低い群」において、「把握可能感」の低さが「心理的ストレス反応」に関連

する可能性が示された。「把握可能感」は、自分の日常生活や人生において直面する問題が何に由来するのかということや、何が起ころうとしているのかを、説明できる、理解できるという感覚である[14]。日本語能力が比較的低い場合、業務内容を理解することも困難なことが予想される。このため、業務の流れや、それによってどの様なことが起こりうるのか先に伝えておく等の対応が、「日本語能力が低い群」のストレス反応をある程度抑制できる可能性があると考える。ただしこれまでの我々の先行研究ではEPA介護福祉士のストレスにSOCの処理可能感や有意味感も関連がみられた[10]が、本調査では「日本語能力が低い群」の「把握可能感」以外は関連がみられなかった。来日1年目の介護福祉士候補者のストレスは、ストレス対処力よりも日本語能力の影響が大きい可能性を示唆する結果と考えられる。

Ⅴ．本研究の限界

本研究では日本語能力の差による職業性ストレス及びSOCの違いや心理的ストレス反応に関連する要因について検証することを目的としており、対象を来日して1年目のEPA介護福祉士に限ったため対象者数が少なかった。また、国籍や宗教、施設形態などを検討しなかった。今後、対象者数を増やし、これらの差異を含めたストレスの関連についても分析が必要である。今回のアンケート調査は、厚生労働省の国家試験合格者リストに掲載されている施設のうち、調査を受け入れた施設でのみ調査をしており、EPA介護福祉士全体の傾向とは言い難く、合格者を輩出し厚生労働省のホームページに記載されている施設以外にも対象施設を増やし、検討する必要がある。日本語能力の差による研究を行ったが、日本語能力試験が年2回の開催であるため、調査時期の日本語能力が取得レベルと異なる可能性がある。日本語能力試験の結果発表の時期を考慮して調査を行うことで、調査結果の精度があがる可能性があるが、それは今後の課題としたい。また、ベトナムからのEPA介護福祉士候補者の来日要件が日本語能力N3以上であることから「未取得者とN5・N4取得者」にベトナム人を含んでの検討は難しく、カイ二乗検定においても有意差を認めたことから標本バイアスを考慮する必要がある。また本調査はEPAで来日した介護福祉士を対象としたが、今後技能実習生も含めて検証し、検討する必要がある。

Ⅵ．結語

来日1年目の外国人介護職者の日本語能力の違いによる、職業性ストレス及びSOCの違いについて検討し、さらに心理的ストレス反応との関連も検討した。「日本語能力が低い群」と「日本語能力が高い群」では、「対人関係ストレス」に差がみられた。「心理的ストレス反応」にはそれぞれ異なる項目が関連し、「日本語能力が低い群」には、業務の見通しを示すことや注意力を援助するサポートが、「日本語能力が高い群」にはやりがいを感じることの出来るサポートが必要であり、日本語能力の違いによって異なるメンタルサポートが必要であることが示唆された。

謝辞

本研究にご協力くださいました各施設のEPA介護福祉士候補者の皆様並びに受入れご担当者の皆様に心より感謝申し上げます。

利益相反

本研究において開示すべき利益相反はない。

Ⅶ．文献

1) 厚生労働省：第31回介護福祉士国家試験の内訳・入国年度別候補者の累積合格率 [Web page]. Available at https://www.mhlw.go.jp/content/12004000/000493552.pdf（閲覧日2021年2月4日）
2) Yi M, Jezewski M. A. : Korean nurses' adjustment to hospitals in the United States of America. Journal of Advanced Nursing, 32, 721-729, 2000
3) Magnusdottir, H.: Overcoming strangeness and communication barriers: A

phenomenological study of becoming a foreign nurse. International Nursing Review, 52(4)，263-269, 2005

4) 王麗華，大野絢子，木内妙子：日本における外国人看護師の保健医療活動への適応実態−医療現場という視点から−. 群馬パース大学紀要，4, 465-472, 2007

5) Alam B，Wulansari S.A.: Creative friction:Some preliminary considerations on the socio-cultural issues encountered by Indonesian nurse in Japan. 九州大学アジア総合政策センター紀要，5, 183-192, 2010

6) 上野美香：EPA によるインドネシア人介護福祉士候補者の受入れ現場の現状と求められる日本語教育支援−候補者と日本語教師への支援を目指して−. 国際協力研究誌，18, 123-135, 2012

7) 長江美代子，岩瀬貴子，古澤亜矢子，坪ノ内千鶴，島井哲志，安藤智子：EPA インドネシア看護師候補者の日本の職場環境への適応に関する研究. 日本赤十字豊田看護大学紀要，8, 97-119, 2013

8) 野田由佳里，古川和稔：技能実習制度における外国人介護労働者の受け入れと課題. 聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要，16, 57-63, 2018

9) Hongliu Ding, Lee Hargraves.: Stress-Associated Poor Health Among Adult Immigrants with a Language Barrier in the United States. J Immigrant Minority Health, 11, 446-452, 2009

10) Berit Viken, Eva Merethe Solum, Anne Lyberg.: Foreign educated nurse's work experiences and patient safety –A systematic review of qualitative studies. Nursing Open, 5(4)，455-468, 2018. Available at https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC6177550/（閲覧日 2021 年 2 月 4 日）

11) 山本哲子, 水上勝義:経済連携協定（EPA）で来日中の介護福祉士の職業性ストレスについて. 高齢者ケアリング学研究会誌，8, 11-21, 2018

12) 前田憲次：フィリピン人技能実習生のメンタルヘルスに関連するリスク要因：文化変容方略に着目して. 国際保健医療 , 33(4)，303-312, 2018

13) 中村誠司，水上勝義：介護サービス職の職業性ストレスと首尾一貫感覚に関する研究−介護パフォーマンスの違いに注目して−. 高齢者ケアリング学研究会誌，5, 1-10, 2015

14) 山崎喜比古監修 , 戸ヶ里泰典編：健康生成力 SOC と人生・社会−全国代表サンプル調査と分析，7, 有信堂高文社 , 2017

15) 日本語能力試験 JLPT [Web page]. Available at https://www.jlpt.jp/index.html（閲覧日 2021 年 2 月 4 日）

16) 職業性ストレス簡易調査票を用いたストレス現状把握のためのマニュアル - より効果的な職場環境等の改善対策のために -[Web page]. 東京医科大学公衆衛生学分野. Available at http://www.tmu-ph.ac/topics/pdf/manual2.pdf（閲覧日 2021 年 2 月 4 日）

17) Antonovsky, A/ 山崎喜比古，吉井清子監訳（2001）健康の謎を解く―ストレス対処と健康保持のメカニズム，221-225, 有信堂高文社

18) 戸ヶ里泰典 , 山崎喜比古：13 項目 5 件法版 Sense of Coherence Scale の信頼性と因子的妥当性の検討 . 民族衛生，71(4), 168-182, 2005

19) 遠藤伸太郎，満石寿，和秀俊，大石和男：13 項目 7 件法 Sense of Coherence Scale（SOC-13）の信頼性と 1 因子モデルの妥当性についての検討：大学生を対象としたデータから. 立教大学コミュニティ福祉学部紀要，15, 25-38, 2013

20) 亀山純子，柳久子：外国人介護職者における就労意向・バーンアウトおよびコミュニケーション能力の特徴に関する研究. 日本公衆衛生雑誌 , 66, 38-47, 2019

21) 林隆司，小林聖美，鈴木康文，曽根幸喜，縄井清志，澤田和彦：介護老人施設職員の職業性ストレス−リハビリテーション職・看護職・介護職・相談職の比較から−. 医療保健学研究，2, 43-63, 2011

22）平成30年度介護労働実態調査介護労働者の就業実態と就業意識調査結果報告書 [Web page]. 介護労働安定センター .Available at http://www.kaigo-center.or.jp/report/pdf/2019_chousa_roudousha_chousahyou.pdf（閲覧日 2021 年 2 月 4 日）
23）畠中香織，山本恵美子，田中共子：在日外国人ケア労働者の異文化ストレス：外国人と日本人の協働に向けた異文化間インターメディエーターの役割．ストレス科学 , 33, 45-56, 2018
24）高畑幸：外国人ケア労働者をケアするのは誰か−経済連携協定により受け入れたフィリピン人介護士候補者をめぐって−．社会分析，38, 43-60, 2011
25）第 10 回 EPA 受入施設及び看護師・介護福祉士候補者調査 [Web page]. 一般社団法人外国人看護師・介護福祉士支援協議会 .Available at http://www.bimaconc.jp/第 10 回 %E3%80%80 実態調査 190918.pdf（閲覧日 2021 年 2 月 4 日）

連絡先：山本哲子
〒 411-8787　静岡県三島市大宮町 3-7-33
TEL：055-991-3111
Mail：t.yamamoto.df@juntendo.ac.jp

令和 3 年 2 月　6 日　　受付
令和 3 年 3 月 16 日　採用決定

Depends on the Japanese language ability level of foreign care workers examination of occupational stress

－ For the first year of coming to Japan －

Tetsuko YAMAMOTO[1)], Katsuyoshi MIZUKAMI[2)]

[1)] Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing
[2)] Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

Abstract

Objective: The purpose of this study is to examine whether factors related to psychological stress response differ depending on the Japanese language proficiency for foreign care workers candidates in the first year in Japan.

Methods: Candidates for a care workers who has been in Japan for the first-year on the Economic Partnership Agreement（EPA）were surveyed with a self-administered questionnaire. For the analysis, participants were divided into two groups according to their performance of the Japanese Language Proficiency Test（JLPT）: those with level N4, N5, or no JLPT certification, and those who achieved N3, N2, or N1 on the JLPT.

Results: The 39 people who agreed to this study were included in the analysis. The 23 were "N4, N5, or non-JLPT certification" and 16 were "N3 or higher" in the first year of their arrival in Japan. From the results of the correlation analysis, it was shown that the “psychological stress response” was high when the “satisfaction with work and life” was low, which was common to the two groups. In addition, it was shown that different items were related to the “psychological stress response” in the “group with low Japanese proficiency” and the “group with high Japanese proficiency”.

Conclusions: The results of the present study suggest that depending on the Japanese language proficiency of foreign care staff in the first year in Japan, factors related to the stress response and the support they need is different.

Key words: Foreign care workers, Japanese language ability, Occupational stress, Sense of coherence（SOC）, Psychological stress response